

知的障害特別支援学校における教育活動への保護者の意向に関する調査研究

岐阜県立可茂特別支援学校 古田 康子
岐阜大学大学院教育学研究科 坂本 裕
九州ルーテル学院大学 一門 恵子

要 旨

特別支援学校教育への保護者の意向を明らかにするための質問紙調査が特別支援学校保護者に行われ、回答が得られた244名の意向が分析された。その結果、保護者の意向は、小学部時は身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性の6つのカテゴリに分類された。また、中学部期は身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性の6つのカテゴリに分類された。そして、高等部期は身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性、進路・職業の7つのカテゴリに分類された。なお、高等部期での健康・体力、身辺・日課処理を改善して欲しいとした保護者は、小・中学部から入学した者30.8%と高等部から入学した者7.5%であった。高等部期での進路・職業を改善してほしいとした者には、小学部入学の者でわが子の育ちへの捉えで心残りがあるとした者が安堵しているとした者よりも有意に多かった。

キーワード

特別支援学校 保護者 意向

I 問題と目的

わが国の学校教育において、21世紀を迎えるに当たり、より一層地域に開かれた学校とすべく、保護者や地域住民の意向を把握し、その協力を得て学校運営を展開することが重要とされた¹⁾。そうした斯界の動きは2006年改正教育基本法において、学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力として明文化されている。

また、特別支援学校教育においても、平成10年版盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説から、保護者の意向等を十分に把握することが新たに加えられた²⁾。更に、2004年改正障害者基本法において『障害者である児童及び生徒並びにその保護者に対し十分な情報の提供を行うとともに、可能な限りその意向を尊重しなければならない。』と明文化された。

近年、更に重視されつつある障害のある児童生徒の保護者がもつ学校教育への意向に関する先行研究としては、小学校知的障害特殊学級在籍児童の保護者への質問紙調査³⁾、就学前の障害幼児の保護者への質問紙調査⁴⁾がある。しかし、特別支援学校在籍児童生徒の保護者を対象とし、特別支援学校教育への意向を調査した研究はない。

本稿では、特別支援学校の保護者を対象とした質問紙調査を行い、近年、更に重視されるようになった障害のある児童生徒の保護者の特別支援学校教育への意向を明らかにすることを目的とする。

II 方法

1 調査対象

東日本地区1県、西日本地区1県の特別支援学校高等部3年生（自宅生）の保護者244名。なお、調査項目に家庭での取り組みが含まれるため、調査対象を自宅生に限定した。

2 調査時期

2013年12月～2014年1月

3 調査手続

2県の特別支援学校校長会において本調査の意図、内容、実施方法についての説明、依頼を行い、了承を得た。その後、視覚障害特別支援学校と聴覚障害特別支援学校を除外したA県内特別支援学校16校、B県内特別支援学校12校の各校長に質問調査紙を郵送し、高等部3年生（自宅生）の保護者485名に配付を依頼した。調査対象者には、調査の趣旨、自由意思に基づくものであること、調査用紙は個別の回答用封筒にて密封して回収されること、回答内容は統計的に処理され個人が特定されないことなどを文書で示し、同意を得た保護者のみが調査に参加した。回答終了後、個別の解答用封筒を学校ごとに留置法でとりまとめ、郵送によって回収した。その結果、287名（回収率59.18%）の回答が得られた。そのうち回答に不備のある12名分を除いた285名分から知的障害のない生徒の保護者の回答31名分を除いた知的障害のある生徒の保護者244名のデータを分析の対象とした。なお、特別支援学校入学時期は、小学部38名、中学部31名、高等部175名であった。

4 調査項目

(1) 学校での取り組みについての評価に関する項目

保護者が学校の教育活動の中で満足しているとした活動と更に取り組んでほしかったとした活動について、小学部（校）、中学部（校）、高等部の期間毎に自由記述で尋ねた。なお、説明文から調査者の質問意図が読み取れるかについて、特別支援学校高等部保護者8名に事前調査を行い、検討を加えて確定させた。

(2) 進学・進級の状況に関する項目

小学部（校）から中学部（校）までの進学状況について、3つの選択肢（通常学級、特別支援学級、特別支援学校）から選択するようにした。

(3) 高等部卒業後の進路に関する項目

高等部卒業後の進路について、7つの選択肢（一般就労、福祉就労、在宅、進学、施設通所、施設入所・入院、その他）から選択するようにした。なお、選択肢は、学校基本調査の卒業後の状況調査票⁵⁾の特別支援学校高等部を参考に設定した。

(4) 保護者のわが子の育ちへの捉えに関する項目

高等部を卒業するわが子の育ちへの捉えについて3つの選択肢（満足している、もう少しがんばってほしかった、やむを得ない）から選択するようにした。

(5) 属性に関する項目

わが子の性別、障害種（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱、その他）を選択するようにした。

5 分析方法

(1) 分析1：保護者による学校での取り組みへの評価についての分析

保護者による学校での取り組みへの評価に関する自由記述による回答内容を、SPSS Text Analytics for Surveys4.0によるテキストマイニングを行った。テキストマイニングとは、複数の文章データの内容を総合的に捉えることで初めて得られる知見を抽出するための内容分析の手法である⁶⁾。本分析では、まず、分析対象としたテキストデータの中での最適解を自動的に探し出しカテゴリ分類が行われる言語学的手法にてテキストマイニングを行った。さらに、示されたカテゴリ分類とその下位に位置するキーワードならびに語のパターンとの関係性を検討し、各カテゴリ分類に命名をした⁷⁾。

(2) 分析2：保護者による学校での取り組みへの評価と他項目との関係性についての分析

① 分析2-1：保護者による学校での取り組みへの評価と入学時期の関係性についての分析

保護者による学校での取り組みへの評価と入学時期との関係性を検討した。まず、保護者による学校での取り組みへの評価で示された教育活動のカテゴリを2値データ化した。そして、保護者が満足していると評価した活動（以下、継続活動）と保護者が更に取り組みでほしかったと評価した活動（以下、改善活動）毎に、入学時期を従属変数、カテゴリを独立変数とした判別分析のステップワイズ法（基準：投入するFの確率 ≤ 0.050 ，除去するFの確率 ≥ 0.100 ）を中学部での取り組みへの評価、高等部での取り組みへの評価毎に行った。統計的有意性はWilksの λ を用いた。なお、従属変数の入学時期については、中学部期間の分析を行う際には小学部入学群と中学部入学群、高等部期間の分析を行う際には小・中学部（義務教育）入学群と高等部（非義務教育）入学群の2群とした。統計解析にはSPSS statistics22.0を用いた。

② 分析2-2：保護者による学校での取り組みへの評価とわが子の育ちへの捉えとの関係性についての分析

保護者による各学部の取り組みへの評価とわが子の育ちへの捉えとの関係性を検討した。継続活動と改善活動毎に、わが子の育ちへの捉えから安堵している群（回答：満足している）と心残りがある群（回答：もう少しがんばってほしかった、やむを得ない）の2群に分け尤度比検定を行った。統計解析にはSPSS statistics22.0を用いた。

III 結果

1 分析1：保護者による学校での取り組みへの評価についての分析

(1) 保護者が継続活動とした学校での取り組みの分析

保護者が学校での取り組みの中で継続活動と挙げた活動を表1に示した。回答数は、小学部31名、中学部62名、高等部221名であった。

小学部期では、身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性の6つのカテゴリに分類された。キーワードのサンプル例としては、身辺・日課処理では、「着替え、排泄、食事」であった。生活経験では、「公共交通機関の利用、校外学習」であった。健康・体力では、「毎日の運動、体力作り」であった。対人関係では、「先生や友達とのかかわり、友達とのふれあい」であった。言語・数量では、「言葉が増えコミュニケーションがとれるようになった、簡単な計算、時計の読み方」であった。主体性では、「自分から何かしようという意欲」であった。

表1 保護者が学校での取り組みで満足したとした活動（継続活動）

学部	カテゴリ	キーワード例
小学部	身辺・日課処理	着替え, 排泄, 食事
	生活経験	公共交通機関の利用, 校外学習
	健康・体力	毎日の運動, 体力作り
	対人関係	先生や友達とのかかわり, 友達とのふれあい
	言語・数量	言葉が増えコミュニケーションがとれるようになった, 簡単な計算, 時計の読み方
	主体性	自分から何かしようという意欲がでてきた
中学部	身辺・日課処理	着替え, 排泄, 食事指導で偏食が減った, 身の回りのことができるようになった
	生活経験	調理実習, 買い物学習, 公共交通機関の利用, 校外学習, 自力通学
	健康・体力	体力作り, 運動すること, ダンスや部活で体を動かすこと
	対人関係	友達とのかかわり, 友達が増えた, 他のクラスの友達や先生とのかかわり, 集団生活
	言語・数量	気持ちを伝えること, 読み書きの練習
	主体性	自分から挑戦できることが増えた, 諦めないで取り組めることが増えた
	進路・職業	作業学習
高等部	身辺・日課処理	身だしなみ, 身の回りのことができるようになった
	生活経験	自力通学, 部活動, 校外学習, 買い物の経験
	健康・体力	部活動で運動することができた, 体力作り
	対人関係	友達とのかかわり, かかわる先生や友達が増えた, 人間関係(部活動), 仲間との協力 協調性
	言語・数量	自分の意思を言葉で伝えられるようになった, 言葉遣いに気をつけられるようになった
	主体性	責任感や自信が身についた(生徒会, 行事の役員), 自分からやりたいという気持ちが 増えてきた
	進路・職業	作業学習, 現場実習, 就業体験, 働く意識, 働く意欲, 働く力が身についた

中学部期では、身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性、進路・職業の7つのカテゴリに分類された。キーワードのサンプル例としては、身辺・日課処理では、「着替え、排泄、食事指導で偏食が減った、身の回りのこと」であった。生活経験では、「調理実習、買い物学習、公共交通機関の利用、校外学習、自力通学」であった。健康・体力では、「体力作り、運動すること、ダンスや部活で体を動かすこと」であった。対人関係では、「友達とのかかわり、友達が増えた、他のクラスの友達や先生とのかかわり、集団生活」であった。言語・数量では、「気持ちを伝えること、読み書きの練習」であった。主体性では、「自分から挑戦できる姿、諦めないで取り組める姿」であった。進路・職業では、「作業学習」であった。

高等部期では、身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性、進路・職業の7つのカテゴリに分類された。キーワードのサンプル例としては、身辺・日課処理では、「身だしなみ、身の回りのこと」であった。生活経験では、「自力通学、部活動、校外学習、買い物の経験」であった。健康・体力では、「部活動で運動すること、体力作り」であった。対人関係では、「友達とのかかわり、かかわる先生や友達が増えた、人間関係(部活動)、仲間との協力、協調性」であった。言語・数量では、「言葉での意思伝達、言葉遣い」であった。主体性では、「責任感や自信(生徒会、行事の役員)、自分からやりたいという気持ち」であった。進路・職業では、「作業学習、現場実習、就業体験、働く意識、働く意欲、働く力」であった。

(2) 保護者が改善活動とした学校での取り組みの分析

保護者が学校での取り組みの中で改善活動と挙げた活動を表2に示した。回答数は、小学部18名、中学部38名、高等部132名であった。

表2 保護者が学校での取り組みで更に取り組んでほしかったとした活動（改善活動）

学部	カテゴリ	キーワード例
小学部	身辺・日課処理	食事のマナー, 排泄
	生活経験	買い物学習
	健康・体力	体を動かすこと, 体力作り, 運動する時間, ストレッチ運動 (柔軟性)
	対人関係	いろいろな先生とのかかわり
	言語・数量	言葉で意思表示すること, 字を書くこと, お金の計算, 学習
	主体性	今できることを大切にしてもらうこと
中学部	身辺・日課処理	身の回りのこと
	生活経験	買い物の仕方や経験, 公共交通機関の利用やマナー
	健康・体力	体の変化への対応, 成長に関する指導, 体力作り, 運動する時間
	対人関係	人との関わり, 友達とのかかわり, 異性との接し方
	言語・数量	自分の気持ちの伝え方, 言葉遣い, 話し方, 学習面, お金の計算, 時計
	主体性	集中して取り組める活動, 自信がもてるような取り組み
高等部	身辺・日課処理	服装や身だしなみのこと, 身の回りのこと
	生活経験	卒業後の余暇につながる経験, 部活動, 大人としてのマナーやエチケット
	健康・体力	運動する時間, 体力作り, 性に関すること
	対人関係	友達とのかかわり, 友達や人とかかわり方, 友達とかかわる時間
	言語・数量	自分の気持ちの伝え方, 言葉遣いやあいさつの仕方, 学習時間を増やしてほしかった 読み書き・計算の時間
	主体性	集中して取り組める活動
	進路・職業	働くことへの希望や不安を除くことなどの指導, 進路に向けての取り組み 複数の場所での現場実習, 進路についての情報提供

小学部時では、身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性の6つのカテゴリに分類された。キーワードのサンプル例としては、身辺・日課処理では、「食事のマナー」であった。生活経験では、「買い物学習」であった。健康・体力では、「体を動かすこと、体力作り、運動する時間、ストレッチ運動（柔軟性）」であった。対人関係では、「いろいろな先生とのかかわり」であった。言語・数量では、「言葉で意思表示すること、字を書くこと、お金の計算、学習」であった。主体性では、「今できることを大切にしてもらうこと」であった。

中学部期では、身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性の6つのカテゴリに分類された。キーワードのサンプル例としては、身辺・日課処理では、「身の回りのこと」であった。生活経験では、「買い物の仕方や経験、公共交通機関の利用やマナー」であった。健康・体力では、「体の変化への対応、成長に関する指導、体力作り、運動する時間」であった。対人関係では、「人との関わり、友達とのかかわり、異性との接し方」であった。言語・数量では、「自分の気持ちの伝え方、言葉遣い、話し方、学習面、お金の計算、時計」であった。主体性では、「集中して取り組める活動、自信がもてるような取り組み」であった。

高等部期では、身辺・日課処理、生活経験、健康・体力、対人関係、言語・数量、主体性、進路・職業の7つのカテゴリに分類された。キーワードのサンプル例としては、身辺・日課処理では、「服装や身だしなみのこと、身の回りのこと」であった。生活経験では、「卒業後の余暇につながる経験、部活動、大人としてのマナーやエチケット」であった。健康・体力では、「運動する時間、体力作り、性に関すること」であった。対人関係では、「友達とのかかわり、友達や人とかかわり方、友達とかかわる時間」であった。言語・数量では、「自分の気持ちの伝え方、言葉遣いやあいさつの仕方、学習時間、読み書き・計算の時間」であった。主体性では、「集中して取り組める活動」であった。進路・職業では、「働くことへの希望や不安を除くことなどの指導、進路に向けての取り組み、複数の場所での現場実習、進路についての情報提供」であった。

表3 判別係数

	関数
	1
健康・体力	.836
身辺・日課処理	.648

表4 高等部期の健康・体力及び身辺・日課処理を改善と評価した保護者と生徒の入学時期の判別結果

入学時期	元のグループ	人数	予測グループ		合計
			小中学部	高等部	
			12	27	39
			7	86	93
	%		30.8	69.2	100.0
			7.5	92.5	100.0

Wilks の λ 906 , $p < .01$

2 分析2：保護者による学校での取り組みへの評価と他項目との関係性についての分析

(1) 分析2-1：保護者による学校での取り組みへの評価と入学時期の関係性についての分析

保護者による学校での取り組みへの評価と入学時期について判別分析（ステップワイズ法）を行った。なお、入学時期は、中学部期間の分析には小学部入学群と中学部入学群、高等部期間の分析には小・中学部入学群と高等部入学群の2群とした。その結果を表3、4に示した。高等部期での改善活動のうち、健康・体力、身辺・日課処理の2カテゴリは、入学時期に有意な相違が1%水準で認められた。この高等部期での健康・体力、身辺・日課処理を改善活動としていた保護者は、小・中学部（義務教育）入学群30.8%と高等部（非義務教育）入学群7.5%の生徒の保護者であった。なお、保護者による中学部期での継続活動、改善活動、高等部期での継続活動と入学時期には有意な相違は認められなかった。

(2) 分析2-2：保護者による学校での取り組みへの評価とわが子の育ちへの捉えとの関係性についての分析

① 保護者が継続活動とする学校での取り組みとわが子の育ちへの捉えについての分析

保護者が継続活動として挙げた活動とわが子の育ちへの捉えについて尤度比検定を行った。その結果は表5に示したようになり高等部期での継続活動の中で対人関係のカテゴリは、わが子の育ちに安堵しているとした群は心残りがあるとした群よりも5%水準で有意に多かった。この高等部期での継続活動に対人関係を挙げ、かつ、わが子の育ちに安堵しているとした保護者は、表6に示したように、高等部から特別支援学校に入学し、中学校段階は特別支援学級に在籍していた生徒の保護者であった。なお、小学部及び中学部期の全カテゴリ並びに高等部期の対人関係以外のカテゴリについては有意な傾向は認められなかった。

② 保護者が改善活動とする学校での取り組みとわが子の育ちへの捉えについての分析

保護者が改善活動として挙げた活動とわが子の育ちへの捉えについて尤度比検定を行った。その結果は表7に示したようになり高等部期での改善活動の中で進路・職業のカテゴリにおいて、小学部入学の保護者はわが子の育ちへの捉えで心残りがあるとした群が安堵しているとした群よりも5%水準で有意に多かった。なお、小学部及び中学部期の全カテゴリ並びに高等部期の進路・職業以外のカテゴリについては有意な傾向は認められなかった。

IV 考察

1 分析1：保護者による学校での取り組みへの評価についての分析

特別支援学校の教育目標、教育重点をテキストマイニングし、小学部では他者、生活、健康、学習、心情、主体性、コミュニケーションの7カテゴリ、中学部では他者、生活、健康、学習、心情、主体性、コミュニケーション、社会・職業の8カテゴリ、高等部では他者、生活、健康、学習、心情、主体性、コミュニケーション、社会・職業の8カテゴリからなる教育内容が重視されているとされてい

表5 高等部期の対人関係（継続）の記述とわが子の育ちへの捉え

入学時期				対人関係（継続）		合計
				なし	あり	
小学部	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	19	4	23
			調整済み残差	.2	-.2	
		心残りがある	人数	8	2	10
			調整済み残差	-.2	.2	
合計			度数	27	6	33
中学部	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	15	5	20
			調整済み残差	-1.0	1.0	
		心残りがある	人数	9	1	10
			調整済み残差	1.0	-1.0	
合計			度数	24	6	30
高等部	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	83	20	103
			調整済み残差	-2.0	2.0	
		心残りがある	人数	51	4	55
			調整済み残差	2.0	-2.0	
合計			度数	134	24	158
合計	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	117	29	146
			調整済み残差	-2.0	2.0	
		心残りがある	人数	68	7	75
			調整済み残差	2.0	-2.0	
合計			人数	185	36	221

合計 尤度比4.354, p<.05 高等部 尤度比4.545, p<.05

表6 高等部期の対人関係（継続）の記述とわが子の育ちへの捉え（中学校在籍学級）

入学時期 中学校在籍学級				対人関係（継続）		合計	
				なし	あり		
高等部	通常学級	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	6	2	8
				調整済み残差	-.6	.6	
		心残りがある	人数	7	1	8	
			調整済み残差	.6	-.6		
合計			人数	13	3	16	
特別支援学級	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	77	18	95	
			調整済み残差	-2.0	2.0		
		心残りがある	人数	44	3	47	
			調整済み残差	2.0	-2.0		
合計			人数	121	21	142	

特別支援学級 尤度比4.453, p<.05

表7 高等部期の進路・職業（改善）の記述とわが子の育ちへの捉え

入学時期				進路・職業（改善）		合計
				なし	あり	
小学部	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	13	0	13
			調整済み残差	2.4	-2.4	
		心残りがある	人数	5	3	8
			調整済み残差	-2.4	2.4	
合計			人数	18	3	21
中学部	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	10	0	10
			調整済み残差	1.2	-1.2	
		心残りがある	人数	7	1	8
			調整済み残差	-1.2	1.2	
合計			人数	17	1	18
高等部	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	37	13	50
			調整済み残差	-1.1	1.1	
		心残りがある	人数	36	7	43
			調整済み残差	1.1	-1.1	
合計			人数	73	20	93
合計	わが子の育ちへの捉え	安堵している	人数	60	13	73
			調整済み残差	.1	-.1	
		心残りがある	人数	48	11	59
			調整済み残差	-.1	.1	
合計			人数	108	24	132

小学部 尤度比6.640, p<.05

る²⁾。今回の調査結果と比較すると、各学部が挙げた心情以外は、保護者が継続内容として挙げたカテゴリとはほぼ重なった。このことから、特別支援学校が設定している教育内容を知的障害のある生徒の保護者は継続に価値を置く内容であると評価しているといえよう。なお、同じ教育内容であっても改善が必要と捉えている保護者もあり、その設定に留まらず、教育活動の実施状況も含めた不断の検討が必要であることも指摘された。

2 分析2：保護者による学校での取り組みへの評価と他項目との関係性についての分析

(1) 保護者が学校での取り組みで継続活動と評価した項目

高等部期での継続活動の中で対人関係を挙げた者は、中学校特別支援学級に在籍した生徒の保護者でわが子の育ちに安堵している者であった。知的障害特別支援学級は中学校一校に概ね一学級が設置されており、一校当たり3.78人が在籍している。特別支援学校高等部は一校あたり87.62人が在籍している⁸⁾。高等部進学により、同年齢の者との関わりの拡大が保護者の意向に影響しているものと考えられる。

(2) 保護者が学校での取り組みで改善活動と評価した項目

① 健康・体力と身辺・日課処理

高等部期において、小・中学部入学の保護者30.8%、高等部入学の保護者7.5%が健康・体力、身辺・日課処理を改善活動としていた。その具体的記述としては小・中学部入学の保護者は性教育、運動・体力、心のケア、トイレ指導、身辺自立、高等部入学の保護者は性教育、体力・運動、身だしなみであった。知的障害のある者の保護者に関わって、性に関してわが子に教える内容やその教え方がわからない状況⁹⁾にあり、また、運動の必要性を感じるとしながらもその実施ができていない状況¹⁰⁾にあるとの報告がある。学校はこうした保護者の状況も踏まえつつ、健康・体力、及び、身辺・日課処理については、生徒の入学時期よりも生徒個々の状態に応じた対応を行う必要性が高いことが指摘された。

② 進路・職業

高等部期での改善活動として進路・職業を示した者は、小学部から特別支援学校に入学した生徒の保護者でわが子の育ちに心残りがある者であった。その具体的記述としては就労体験の機会、進路に関する情報提供がその主たるものであった。藤原は重度の子どもの進路先は選択肢が少なく、かつ希望する場所での通所や入所が難しい状況にあるとの指摘¹¹⁾がある。また、進路に関する情報提供について、その情報の受け止め方は保護者のその時に置かれた状況によって異なることもあるとの指摘¹²⁾もある。こうした進路・職業に関する生徒や保護者の困難さ、多様さを踏まえ、担任、進路担当者等は個別の教育支援計画等から、生徒や保護者の歩みや思いを了察した支援が不可欠であると思われる。

謝辞

本調査に協力いただいた保護者の皆様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 中央教育審議会『今後の地方教育行政の在り方について（答申）』, 1998.
- 2) 古田康子・坂本 裕・日比 暁「特別支援学校における保護者の意向を踏まえた教育課程編成に関する基礎研究」『教師教育研究』第10号, 2014, pp.163-168.
- 3) 西 正道・緒方 明・坂本 裕「小学校知的障害特殊学級における保護者と学級担任の連携について (1)」『岐阜大学治療教育研究紀要』第24号, 2002, pp.9-17.
- 4) 坂本 裕・松本和久・小石麻利子「障害のある幼児の保護者の学校教育への期待に関する調査研究(1)」『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』第52号1巻, 2003, pp.189-193.

- 5) 文部科学省『平成24年度学校基本調査』, 2012.
- 6) 那須川哲哉『テキストマイニングを使う技術／作る技術』東京電機大学出版局, 2006.
- 7) 内田 治・川嶋敦子・磯崎幸子『SPSSによるテキストマイニング入門』オーム社, 2012.
- 8) 文部科学省『特別支援教育資料』, 2012.
- 9) 菊池圭子・井上京子・遠藤恵子「特別支援学校の児童生徒の性に関する調査」『山形保健医療研究』第13巻, 2010, pp.71-81.
- 10) 高畑庄蔵・武蔵博文「知的障害者の食生活, 運動・スポーツ現状についての調査研究」『発達障害研究』第19号, 1997, pp.235-244
- 11) 藤原里佐「養護学校における教育の特性と課題」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第82巻, 2000, pp.165-176.
- 12) 小山高志・内海 淳「特別支援学校進路指導における保護者の進路意識に与える要因の検討」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』, 第34巻, 2012, pp.93-104.